第３３４回　令和８年１１月２０日（金）

「競技の終わりに」

これは私の指導者時代の考え方です。当時の高校バスケットボールは４月に関東大会予選、５月から６月に高校総体予選という２つの大きな大会がありました。４月の関東大会は県から５つの代表が関東大会に出場することができます。その後の高校総体は２校が全国大会に出るという狭き門でした。

１年間のスタート時、選手が目標を決めます。ここには私は一切口出しをしません。日本一でも、地区１回戦勝利でも構わない。その目標によって日々の１歩の大きさが変わるだけだと話していました。どの代もだいたい関東出場を目標に挙げていました。

ここは選手と私の気持ちが一致していた部分でもあるのですが、５月の高校総体に対する考え方は「３年生のための大会」ということでした。引退する３年生が悔いなく終わること、これをいつも「コートに忘れ物をしない」という表現で伝えていました。

４月の大会が終わると私はコートの片隅から静かに選手を見ることが多くなります。もちろん指導は継続しますが、心の中は３年生とお別れする寂しさでいっぱいでした。県大会を勝ち上がるごとに１週間ずつコートで過ごせる時間が延びていきます。「県内で８校の３年生だけに許された１週間を大事に過ごそう」と言って、３年生とのコミュニケーションを大切にしていたことを思い出します。
それでも最後の大会だからと言って感傷的になるわけではなく、いつもどおり自分たちのベストを尽くします。終盤、敗戦が大方決まると私はタイムアウトを取って、３年生にいつも同じ言葉をかけました。「ここまで本当によくがんばった。最後はコートに忘れ物をしないように、自分で好きなプレーをしなさい。」涙ぐむ選手もいましたが、試合終了のブザーが鳴るまで全力で駆け回ってくれました。

最後のミーティングでは全体に話した後、３年生だけ集めて別にミーティングしました。そこで選手に感謝を述べた後、一人ひとりと握手をして終わりました。一生懸命頑張った３年生に「終わった」ことを確認させ、次のステージでも頑張ってほしいことを伝えました。

すべての生徒を満足させられたわけではないと思います。目標についてもそうですし、試合の出場時間や、ケガについても申し訳ない思いをさせてしまった生徒もいると思います。私自身負けた時には自分の力のなさを痛感して苦しみましたし、選手のせいにしたことはありません。「負けたのは監督の責任、勝ったのは選手のおかげ」です。

卒業しても多くの生徒が慕ってくれることがなによりの宝物です。本当にありがたいと思います。